

唯一道に生きる

努力

唯一すじに生きてゆくことは辛いことかも知れぬ。しかし自己の全人格を真に生かし、実現してゆくには、自分の道を生きぬいて行かねばならぬ。

どんな堅い岩をも人の手は打碎いた。昔の人が想像することも出来ないほどの大建築物をも成就した。凡人が出来ないと考えたことでも人間の誰かが成就した。ただ努力が成就したのだ。堅忍不拔の努力が成就したのだ。堅忍不拔の努力をぬきにして何が出来るか。

光明団の支部が出来る。その中堅には必ず一、二の生ききつた人がある。

あの人は狂者ではないかと笑われる。狂者だと笑われても信じたらどん／＼実行する。ほめてくれる、貶してくれる。そんなことに見向きもしないで、人の胸をたたいてまわる。この狂者だと笑われ、光明団のぼせだとさげすまれる人の前途を見ていてほしい。

頭が悪いのが良くはならない。体が小さいのが大きくはならない。頭はそのままがいい。学歴もそのままでよい。ただ、自分全体をなげ出し、捧げきることだけは出来る。凡人の最後に与えられたたつた一つは自分全体をなげ出してゆくことだけだ。

「聖光」をお読み下さい。そして読者を御紹介下さい。私は何と言われてもそう申し上げずにはいられない。もしそう言っておすすめることが悪かったら、最初からこれを出さないがいい。勢力を拡張したいのか、数を増してよろこびたいのか。何とも言つて下さい。あなたが、読者を御紹介下さる、お友達におすすめ下さると、「光明団の提燈持ち」「雄誌を紹介してだけでももらいますか」色々な嘲笑があびせかけられる。閑人たちには何とでも言わせておいて、仕事をして下さるお方はどんどんその道をすすみます。

人生は決して座つて議論している人の手にはなくて、一本道を努力する人の手にあります。私はただ一本道を努力して下さる人を信頼します。

あなたの村にあなたが一人います。あなたの友に御紹介下さい。そうしてまず十人の読者をおつくり下さい。その方々が集つて、明るい村の建設に努力して下さい。あなたの村を生かすのはあなたです。

世渡り上手

私はある意味で、世渡り上手を嫌います。

光明団がある地方にのりこみます。双手をあげて歓迎される所があります。ある地方では、一二の嫉妬する反動家に乗ぜられて、国賊の如く、人類や宗門の敵の如く、悪宣伝をされ、迫害され、攻撃される地方があります。民衆は時に何でもないことを誤解したり、問題にしたりします。開けない地方では今でも洋服を着て宗教の宣伝や思想講演をする私を見て、僧でない、僧衣を着ていないとて、恐れたり、迫害したり、

攻撃したり、誠になさけない思いをしなければならぬ場合がいくらでもあります。こうした人たちに、東京市の現状が知らせたい。大都会から、田舎に何が流れつつあるかを知らせたい。無智と野変と頑固とは、何時でも罪悪そのものです。時には、武装した剣の行列の中のような所を通ることさえあります。ここに一人の世渡り上手の本部員があつたとします。光明団が歓迎せられる所では、光明団の顔で歩きます。もしそうでない地方に行く時には、そつとレットルを変えて何くわぬかおで、光明団の「光」も言わないで上手に渡つてゆく。これが即ち世渡り上手です。

私が光明団を生かして来る時には、こんな方法だけは使いようがなかつたのです。ある地方と他の地方と二様の講演は致しませぬ。私は私の態度と歩みをはつきりとして歩みます。時にはルーテルのいわゆる、屋根の瓦までが全部、悪鬼となつて私をかもうとも歩まなくてはならぬ世界は歩みます。随つて私は、妥協せず申します。もし私のこの態度がいけないと思う者はずんずん逃げてゆくことであります。

「どうぞこの地方では光明団の光の字も出さないで講演をやつて下さい。」私はおことわりして帰ります。

愚なる頑固や片意地に生きた生命はないが、さりとて、右から強くつかれたら左にまがり、左から強くつかれたら右にまがる。そうしてお座なりに上手にやつて通ることなどは、商売人だつて少し正しい人であつたら嫌います。

正しい力

名を惜しむということとは人間性の一つである。しかし名を惜しむということが世々間態を装うことである場合には、卑しむべきことがらである。人の当然なすべき義務を果してゆくことを意味するならば、それはなくてはならぬことである。武士は名を惜しんだ。それは決して世間的であることを意味しないで、義務のため責任のためには生命をなげ出して生きることを意味した。恩に背き、正義をふみにじり、約束を破り、破廉恥な行爲をしたり、貪欲であつたりすることは武士としてあつてはならぬことであつた。我らはこうした意味において名を惜しみたい者である。

しかし名を惜しむということが、世間態をつくらうことであり、自分の小さな立場を失わない為に、如何に正義が蹂躪されても、無理が通つていても、腐敗した社会が出現していても、強い悪人のために虐げられて泣いていたり、知らぬ顔していたりするのは名を思うて自分を生きて行かないのだ。

我らは弱い善人、弱者の平和、実力なき善良がどんなにみじめなものであるかを知りすぎている。頭がふるくて圧迫や弾圧を部下に加え、いばつている校長や、課長の下に一言の忠言も反対もし得ないで姑息に黙つて引きずられてる弱い人の群を知りすぎる。因襲的な権力を確守するために、民衆を無智のままに封じて、新しい教団の人たちを一步も村内に入れないように圧迫している寺院を知りすぎる。来て進んだ講演が聞きたくても大手ふつて来ることさえなし得ない弱い人たちの群、こうした悲惨な人たちの魂の中に消えぬ霊火をつけぬ以上、日本は決して、明るい世界になりようがない。

たたかい

我らは真に平和を望む。

しかし安価なる平和に死んではならない。

我らは死の平和を続けるよりはむしろ真の平和を招くために、又価値ある人生を実現するためには、戦わねばならない。弱い我らと戦つて強く一本道を生きねばならない。それは苦悩から苦悩へであるかも知れない。血みどろであるかも知れない。しかしそれが尊い生活への歩みであり、金剛の信念であるならば、その自覚は決して、妥協したり、停つたり、道草したりすることを許さぬであろう。

道

しかし我らは強く一本筋の道を生きるということをはき違えて、我慢を通すことや、意地張りであることを強いと自惚れてはならない。暴虎を手打ちにしたり、高山を一合目二合目と道によらないで、むやみにかけて登つたりするような、空元氣や軽はずみなことをして痛快がつかはならない。真の強さは道を極めることであり、真実に生きることであり、道を歩むことである。正しいと信じた道は矢が降つても、血を流しても、歩まねばならない。道を歩むことと、真の強さとは一致する。唯一心追に生きることに、我らにとつてはしよせん道をゆくことが真の人生生活そのものである。

やすいん

私の心は限りなく安らぎを求める。

深山のような静けさと、その深山の中の湖のような安らぎを求める。

生命の充実と創造は恵まれた安らぎの中にのみある。

犯人が捕らえられる前に持つような心の動揺、自信なくして試験場に出る時のような不安、軍人が梁木を渡らされる時のような危険、重罪人が死刑執行を言渡された時のような絶望……動揺・不安・危険・絶望、そうした生活の中に真に生々とした生活のありえようは無い。

温い寝床の夢のときれに春雨を聞くようなやわらかさ

柔和な肥満しきった牡牛が静々と歩むようなおちつき

静かなる村里の夕暮れに森の彼方に登る満月のような静けさ

試験合格の通知を受け取った少年の胸に輝くような洋々たる希望

結婚前の処女の胸に奇しくも秘められたような桃色の憧憬

そのいづれの心持にもものびゆく人間の相があり、恵まれた現実の静けさと、洋々たる未来がある。

私は限りなく心の安らぎを求める。

安らぎの中のみ、ほんとうの私があり、真実の活動があり、力があり、喜びがある。

故郷

「天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも」

この一首、遠く故国をはなれて支那の地に立った阿部仲麻呂が、静けく安らかな故郷を憶う心は、なつかしく安らかな心である。

故郷を憶う心は、なつかしく安らかな心である。故郷は常に安らかな静かなものとして印象づけられている。

肉体の故郷、それは旅にいる者によつては懐しい所に違いない。しかし肉体の故郷は必ずしも霊の故郷ではない。

心の常に通う故郷はいずこ。

それは彼が一番愛され、あたたかくされる世界である。

たとえ自分の家庭であつても、冷たい人が充ちていたり、争いばかりつづけているならば、それは決して、真の意味の懐しい故郷ではない。心の通う温い世界を持たない者は流転する。人は必ず、温かく愛してくれる人の上に心をすえる。心の通う温い世界を持たない人は不幸である。温い家庭を持たない者も不幸である。温かい親も、温かい夫も、温かい妻も持たない者は不幸である。

彼が温かい世界を与えられた時、その世界は彼の安らかなる霊の故郷となる。あなたの心はいずこに通うのでしょうか。

聖郷

大地の上には春は訪れた。自然の恵みを素直に受けて、万物は彼自身の相のままに輝いて生きる。濁りなき色彩の衣をつけ、希望の太鼓の調べも軽し、目は歓喜の涙にうるみつつ、調和と荘嚴と壮麗の行進を進めてゆく。

人の子が争いあい、戦いあい、背きつつ、罵りつつ、暗い世界に泣いていようとも、春の行進曲に変わりはない。

深山の谷間、川の土手、大自然の胸に想いを送れ、そこに安らかな世界がある。大自然の美も我らに安らぎを与える。

花が咲いたら蝶をひきつけ、火鉢があつたら人をひきつける。

一人格の上に花が咲き、火がつけられると嫌でも応でも人が集まる。温かい信仰に生きた人格は、人生に苦悩する多くの人の霊の安住所であり得る。

しかし人は人であつて神でもなく仏でもない。人間の持つ理論愛には、制約があり限りがある。

心の故郷に帰りゆけ、

久遠の聖郷を浄土という。

この久遠の聖座に永遠の故郷がある。

心を弘誓の仏地に樹て、念を難思の法海に流す。

「超世の悲願聞きしより 我らは生死の凡夫かは

有漏の穢身は変らねど 心は浄土に遊ぶなり。」

真の安らぎは平等絶対の恵みの中にまかせきつて生きてゆく合掌の世界にある。

動乱の中

真の安らぎを求める人の世界に嫌な不安や争鬭や罵りや陥りがはてしもなくつつく。

我らは嫌でもその中に住まねばならない。

安らぎを求めるからとて、何時までも安らぎの中に平安な眠りを貪つてはいられない。それは卑怯である。むしろそうした苦悩に満ちた人生の波乱のただ中に立つて

安らぎを生かさねばならない。

安らぎは単なる安らぎではない。動乱の中の安らぎである。

真の安らぎに生きた心でこの動乱を受け取つてゆく。

動乱や変化のない単なる安らぎは、意義なき平安である。

禍や悩みや不安を亡ぼすのでなくて、静かにこれを動かぬ心に受けてゆくのである。安らぎの尊いのはそこにある。

動かぬ世界に心を樹て、それを背景に限りなき生死の無明の世界に生きてゆく。具體的な人生はそこにあるのだ。

金と道

金と人生

人の体には血液があります。生きて動いている間、真赤な血液が体中を廻^{めぐ}つて各部を養いつつ、浄化しています。もし血液がいい工合に動かなくなると危険でありますから、医師が診察する時にはすぐ脈をとります。体温と脈搏の如何は、体の強弱健病そのものを現わしています。

体に血液があるように、社会には金銭という血液があつて、人の懐中から懐中へと流れています。金なくしては絶対に現代文明人の生活はありません。一燈園の如くたとえ極く少数の人たちが、行乞とか托鉢とかの名で直接金銭を取り扱わないで、人の恵みに生きてゆく生活をおつても、それは直接に、金銭を取り扱わないのみであつて、決して金銀なくして生きているわけではありません。そのかげには、汽車の切符を買つて与える人もあれば、食事を買つて与える人もあるのです。ですからもし、昔の如く、金銭何するものぞ、物質なものぞと金銭を軽蔑するような修養や信仰がありとするならば、それは食つて行けない修養であり、あるいは中世紀以前の宗教であつて、現代の我らには用事はありません。たとえ社会の一部に物質を眼中におかないで恵みに生きる人達があつても、それは決して万人の上に行くことの出来る道ではありません。

現代の社会組織・生活様態では、金銭なきものは社会の落伍者となり敗残者となり、人生の幸福はその人の前には封じられてしまいます。衣食住はもちろん、学問するに6も、地位を得るにも、事業を成就するにも、文化的施設をするにも、交通を便利にするにも、金銭物質なくしては出来得ません。

ですから我らは物質を眼中におかず、これを軽んずる考えを取り去らねばなりません。物質金銭そのものは決して汚いものでもなければ悪いものでもありません。眼中におかないのが悪いどころか、現代では物質が如何に生産せられ、如何に分配されてゆくかの問題が重要な問題となつて、色々な思想が生れて来て、各国共に頭を痛めています。小作争議・労働争議等は社会の表面にあらわれた問題だけでも、その奥には物質に対する鋭敏なる思想が動いています。これらは皆物質に対する在来の考えより一歩進んで、物質を基調とせる社会生活の真相を知り、人類生活の幸福と理想とを實現して行かうとするのであります。ですから我らは金銭に対するしつかりとした考えを打ちたてて行かねばなりません。

正しき所得

口から食物をとれば、便が出るように、心臓に流入した血液は、又体中に出なくてはならぬように、入つたものは全て出なくてはなりません。人間の体から便が出なくなつたら、重患でありやがて死であります。金が入るばかりで出なかつたら吝嗇という病氣です。出るばかりで入ることがなければ、貧血になり、死に至り、あるいは破産いたします。入るばかりで出なくても危険ですし、出るばかりで入らなくても危険です。出ることゝ入ること、この二つは考えて見なくてはならぬ重要な問題です。

如何にして我らは金銭を得るか。そこに初めて道があります。金銭を得るのには正しい労働によらなければならぬ。正しき労働のうちには広く肉体労働のみでなく、精神的労働をも含むのはもちろんであります。

近頃の新聞は、強盗・窃盗等の横行でしきりににぎわっています。現在日本には、刑務所に御厄介をかけている囚人が約三万七千人います。その中で窃盗犯人が二万人余、強盗犯人が二千五百人余、詐欺及恐喝犯が三千五百人、横領が一千人、これらはすべて不正なる所有方法によつて刑務所に入れられた人たちであります。

直接人の物を盗むことの悪いのはもちろんですが、たくみに法網をくぐつて不正なる所得に生きている者が果して先にあげた人たちのみでしょうか。堂々たる肩書をする人たちが金の力で買収されたり、代議士がわずか数万の金で節操を買つて恥じなかつたり、選挙民が金を取つて選挙したり、要路の大官たちが国家事業を私して賄賂をとつたりするような事件が、続いておこることは国民として歎かましいことでもあります。歴史を見ても腐敗した社会状態になつた時は賄賂横行の時代であります。金を得る前にその金が正しい生活の上に立つて得られたかどうかが問題であります。現代人にとっては、金はある一つの大きな魅力を以つて我らを誘惑します。大抵の人は、金か地位かを以て誘惑されれば動かされます。正義よりも金の方に力を持たす所に金による墮落があります。

金力よりも真実の力に勝たせなくてはなりません。

遊んでいて一攫千金の千金の夢を見ている者の多くなつたのは、日本の好況時代よりこのかたの国民の傾向であります。これほど社会を不健全にし危険にするものはありません。

懐手しつつ美しく衣食住をして行かうとする人間は、地上に生存の意義を持たない人です。私は宗教家も、芸術家も、音楽家も、それらは直接生産には携わらなくても、生きていていいと信じ、なくてはならぬことを信じます。労働者でなくては生存権はないように考えたり言つたりする思想は、具体的な人生を知らぬ思想であつて、人間生活はそんな窮屈な世界ではたまりません。しかしながら、如何にして、多くを民衆から搾取するかを考えて、これがために宗教を利用したり、芸術を利用したりする者や、ただいたずらに祖先の遺産によつて徒食したり、不正なる手段によつて生きてゆく人たちは地上にないまでに、もつと人類は覚めて来なくてはなりません。そうして一定の職業の上に正しい所得に生きてゆく人もつて満たされ、不正なる金の誘惑に打ちかつ人でなくては社会人としては生存の意義がないまでに国民全体がさめなくてはなりません。

どんな社会変革があつて理想的な政治組織や、社会状態になつたつて、遊んでいて寝ていてその口に食事を持つてきてくれる日はありません。「力の限り働け」それは何時の日だつて守らねばならぬ言葉です。道草を食つたり、かぶれたりしないで、若い者はどんどん勉強して実力を涵養しなければなりません。もし働くのに仕事がないかつたり働いても食えない人があるならば、国家は政治の力によつて、社会問題として解決しなければなりません。社会の一部に、働いても不幸にも食えない極少教の人

たちがあるからとて、それを全般のように考えて怒号したり、自分は何もしないでいて、若き日を建設なしに終るのは惜しいことでもあります。私どもはまず正しい方法によつて正しく所得することに生きねばなりません。

金の活用

金のない時に、その人格が何であるかがわかるように、金を持たして見るとその人がわかります。

社会人としての義務さえはたさず、人に恵むことも使うこともしないで金をただ蓄えることばかりに、一生を使う人があります。それはただ、金の番人であり、ただ荷物を背負ふ駄馬で一生を終るのです。その人が死んだあとではきつと、誰かが痛快に使つてしまいます。吝嗇家の後には、放蕩息子が出るのも少くありません。放蕩息子は自然の下剤のようなものです。

儉約の儉の字は決して金を使わないことではなくて使うことです。ただ最も有益に有数に使うことです。愚か賢かの問題はお金や物質を如何に使うかによつても別れます。一ヶ月中の汗脂の結晶を一晩か二晩かで酒と女とにしてしまう者もあります。口では何と言つたつて、淨財を恵まれて、それを遊廓で使う宗教家があつたら、その人を信用し崇拜する社会があるでしょうか。

宗教家にはお金はいらぬという考え方があります。私は遺憾ながらこの考え方には生きられませぬ。私には金がいります。人一倍要ります。それは決して貯蓄して子孫に美田を残すためでも、贅沢をするためでもありません。

三十五円のお金は富豪一日の遊興費にも足りません。しかし大学生一人を一ヶ月東京におくれます。本部から勉強に行つていながら苦学させなければならぬ彼らに、せめて月々拾円づつでも送つてやつたら助かります。

拾円のお金で『聖光』が百冊出来ます。百冊でも千冊でももし私に余裕があれば、日本の工場に働く全部の人たちに寄贈したい。月々の醤油代にも苦しむ田舎の青年男女の手に無代償で送りたい。

私が疲れた日に私の卓上に美しい林檎を盛つて下さるのも有難い。

私の着物が破れた日に立派な衣服を作つて下さるのも有難い。

私を慰めるために慰労宴を張つて下さるお心も感謝します。

その上の我儘をお許し下さるならば、私は遠慮なく申し上げます。どうかそうしたことに使うかわりに五十銭でも一円でも私にお金を下さい。決して粗末には使いませぬ。私にはなさねばならぬことがあまりにありすぎます。

金銭の前に強者となれ。

金を使え、金に使われるなかれ。

金を得るよりも前に、生命を自己の使命に捧げてかかれ、そうして与えられた物によつて生きてゆくことは許されてあることであり、当然のことである。使命より先に金を数えてかゝる宗教家・教育家……そこに墮落がある。

皆是仏物

蓮如上人の物に対する御生活をうかがいます。

「衣裳等に至るまで、我が物と思い、踏みたくること、浅ましき事なり。悉く聖人の御用物にて候ふ間、前々住上人は、召物など御足にあたり候へば、御頂き候ふ由承り及び候。」

「蓮如上人、物を聞召し候ふにも、如蛮人の御恩にてましまし候ふを御忘れなしと仰せられ候。一口聞召しても、思召し出され候ふ由、仰せられ候ふと云々」

「御膳を御覧じても、『人のくはぬ飯をくふ事よ』と思召し候ふと仰せられ候。物をすぐにきこしめす事なし。たゞ御恩の貴き事をのみ思召し候ふと仰せられ候。」

「蓮如上人、御廊下を御通り候うて、紙切の落ちて候ひつるを御覧ぜられ、『仏法領のものをあだにするかや』と仰せられ、両の御手にて御頂き候ふと云々。『総じて紙の切なんどの様なる物をも、仏物と思召し御用ひ候へば、あだに御沙汰なく候』の由、前住上人御物語候ひき。」(御一代聞書)

以上を拝読して味わう時、古聖の物に対する御生活がしのばれる。

食事する度に合掌して御恩を思う心、衣服が足にあたつてさえ、おしいただいて謝する心、廊下で紙ぎれを拾つて、仏物の粗末となつてゐることを懺悔して冥加をはづる心、信仰に裏づけられたこの心が物質の上に生きた時、金に対する生き方の問題は解決する。合掌して捧げ、合掌して受ける時、恵む者も恵まれる者も傷つかないで、一つの物が両方を生かす。

一本の万年筆が何年使われたか。一本の鉛筆が少なくなるまで手元にあつたか。塵捨箱の中に何が捨ててあつたか。

修繕すれば使える物がそのまま捨てられはしなかつたか。

我らは富んでいることを必ずしも尊ばない。貧しいことを必ずしも軽んじない。富者は如何に生きたか、貧しい日には如何に生きたか、それが問題である。富んで高慢ならず、吝嗇ならず、貧しくして礼を失わず。自暴自棄せず、不正ならず、道は貧富いづれにもある。